

日本分析化学会「学会活性化戦略委員会」からの提言

——学会活性化のための具体策——

日本分析化学会は、昨年度60周年を迎え、本年度は公益社団法人へと改編し、歴史のある学会としての姿を示しています。分析化学とは、物質の同定、単離、分離、計測を行う、学問、理論、方法論に関する学問分野であり、当学会には、バイオ分析、環境分析から、地球科学的な分析までを網羅する幅広い研究者が集っております。

一方、近年の分析化学会は、少子化や経済の影響もあり、会員の減少が続いており、個人会員数は現状で約4,500人です。以前から、収入と事務費などの支出とのアンバランスが指摘され、改善への努力が進められてきておりますが、早急な課題として会員の増加および事業の拡大が望まれています。そこで、学会内に「学会活性化戦略委員会」を設け、理事会の承認を得て3月より委員会をスタートしました。委員会の目的は、学会の財政を主眼とするものではなく、いかに魅力的な学会を作り、そこに活性化した事業の花を咲かせるかということです。このことにより、大学、企業、その他分析に関連する研究者達が集う、強力な集団を作り上げたいと考えております。この目的達成のため、大学関連だけではなく、企業、団体（分析機器工業会）などにも協力をお願いし、以下の課題についての議論を行い、学会活性化の具体策を作成しましたので、ここに会員各位にお知らせいたします。

議論した主な課題

- 1) 会員増計画の策定（新分野の発掘、魅力ある学会づくり、会員メリットのあり方の検討など）
- 2) 年会の活性化と本部事業の検討（年会の活性化、部会の新設、本部黒字化スキーム作成など）
- 3) 支部の活性化（ブロック制の導入および講演会、討論会の活性化、支部の黒字化など）
- 4) 学会ホームページの刷新と利用法の検討（広告やリンク、さまざまな情報発信などの検討など）
- 5) 学会刊行誌のあり方の検討（新規発行本・教育書、ぶんせき誌などの既存誌内容見直しと市販化、電子化の検討、HPとリンクなど）
- 6) 企業の法人・団体会員のあり方の検討（会費見直し、維持会員制度の新設、法人会員サービスの見直しなど）
- 7) 個人会員のあり方の検討（個人会員個別サービスの実施など）
- 8) 標準試料作製販売と分析事業所認定事業の安定運営スキームの検討
- 9) 産学の連携強化と共同事業の新設（企業会員へのサービス、産学事業の新設など）
- 10) 各種委員会・賞などの見直し（産学委員構成、新設委員会・WGの発足、若手の会強化策など）
- 11) 学会国際化の強化（新たな国際会議企画、既存のコンファレンスの見直しなど）
- 12) その他の学会の重要事項

以下に記述する「学会活性化戦略委員会」からの提言は、会長および理事会への学会活性化具体策の申し入れであり、特に

2013年度の会長のもとで、実行に移すことを期待するものです。そのため、新たな委員会およびワーキンググループ(WG)の発足も提言に加えております。今後、2013年度の会長（寺前紀夫会長）を中心に理事会等で議論され、さらなる活性化案や修正が加えられて実行されていくものと伺っております。

分析化学は境界領域であり、化学だけでなく、物理、医学、生物、情報、電気などの様々な分野との連携が分析化学の技術が必要としております。どのようにしたら分析化学会が大きく発展していけるのかを議論した以下の学会活性化具体策を基礎として、ここ2年で早急に進め、学会の一層の発展を願っております。会員各位のご支援とご協力をお願いいたします。

2013年2月

学会活性化戦略委員会委員長 鈴木孝治
同副委員長 尾崎幸洋
同副委員長 金澤秀子
同副委員長 紀本岳志
同委員一同

開催した会議

- ・第1回委員会（3月23日、東京）
- ・第2回委員会（5月18日、「分析討論会」前日、鹿児島）
- ・第3回委員会（8月21日、東京）
- ・第4回委員会（9月18日、「分析年会」前日、金沢）
- ・第5回委員会（11月28日、東京）

学会活性化策（2012年度「学会活性化戦略委員会」報告）

2012年12月21日

学会活性化の具体策（案）

1) 年会・討論会

（年会関連）

・年会と討論会はそれぞれ春と秋に毎年行われてきたが、年會に集約して企画を拡充し、さまざまなシンポジウムや本部主催の中長期テーマを主題として取り上げる。（最近の討論会は、年會のプログラムに類似している。この慣行を廃止して、年會に集約することで、年會を活性化し、魅力的なものにして参加者を増やす。）

・本部に常置の「年会活性化委員会（仮称）」を設け、中長期のテーマ（例えば、3年程度の学会や年會が活性化するような戦略テーマ）やその時点で特に重要と考えられるテーマ、シンポジウムおよびプログラムを考え、年會で活発な発表が行えるようにする。この委員会は常設とし、毎年年會内容を見直し、年會が活性化し、参加者が増える企画やプログラムを議論する。

・他分野あるいは他学会からも積極的に研究者を招き、当学会の会員になってもらう新しい分野のシンポジウムを戦略的に年會に入れる。シンポジウム企画には公募も受け入れ、「年会活性化委員会（仮称）」が中心となって毎年年會を見直したうえで企画し、年會の充実と活性化、さらには会員増強を進める。

・年會の発表は、1時間ごとに分野ごとのPI (Principal Inves-

tigator, 研究リーダー) 講演を 20 分, 一般講演 10 分を基本として, 年会プログラムを組み上げる。PI には若手中堅を問わず, それぞれの分野で活躍している方を年会に (毎年) 呼び, 講演していただく (謝金はなし)。一般講演を短くすることで, 口頭発表数を減らさない, 主題テーマの講演も短くするが, 場合によりポスターとリンクして発表してもらうなどの工夫をする。

- ・年会前日に基礎講座を行い, 企業会員向けの講習会を提供する。必要によっては産学での企業向けのシンポジウムも行う。
- ・年会の開催場所については, 4 ブロック制 (北海道+東北, 関東, 中部+関西, 中国・四国+九州) を組んでの持ち回りで行う。開催ブロックでは, 各支部から推薦される年会実行委員会を組織し, 「年会活性化委員会 (仮称)」と協力して, 本部・支部の共催として企画し, 運営にあたる (年会と討論会を 4 ブロック制で行うと, 各ブロックは 2 年に一度は年会あるいは討論会の担当になり, 収支が黒字の場合には, 本部とブロック (支部連合) で折半とするなど, 本部・支部ともに財政面でのメリットがある)。
- ・年会での懇親会の前に, 0.5~1 時間ほどの産学官エグゼクティブセミナーを開き, そこでは, 官庁, 分析機器工業会や企業のトップなどから 1, 2 題の話をしていただき, その後に懇親会を行う。なお, 新設する分析文化功労者表彰 (Analytical Sciences Heritage Award) (仮称) 受賞者がいれば, その講演を行う。

（討論会関連）

- ・近年の討論会は, 年会のプログラムに類似しているが, この慣行を止め, 名称を「分析分野・主題別徹底討論会 (仮称)」と変更して, 分析の各分野や主題に特化した真の討論会を設ける。学会内のすべての懇談会, SS をはじめ, 分野や主題に特化したシンポジウムや中小規模の国際会議などを同じ場所で開催し, 分析化学を含めた分析科学についての徹底討論の場を提供する。なお, 懇談会, SS の見直しと再編 (新設を含む) および強化から, 重要かつニーズの高い分野別組織を作り上げる。
- ・「分析分野・主題別徹底討論会 (仮称)」は, 「年会活性化委員会 (仮称)」が中心となって毎年見直しを行ったうえで企画し, 徹底討論会の充実と活性化を図る。
- ・全国規模の若手の会を会期に合わせて開催し, 親睦のためのミキサーやエクスカージョンを設ける。
- ・「分析化学会女性研究者・会員ネットワーク (仮称)」を新設し, 徹底討論会の際に, 全国規模の会議と懇親会を行う。この目的のために, 産学の男女共同参画委員会が主体になった「分析化学会女性研究者・会員ネットワーク (仮称) WG」を設ける。

2) 若手の会

- ・全国規模で, 本部企画で行う。若手の会の委員長は理事となり, 本部支部との調整を図りながら, 徹底討論会 (仮称) の会期に合わせて企画運営に努める。
- ・現状で, JASIS (9 月) において, 分析機器工業会主催の産学若手中心の国際ポスター発表が継続的に進められており, この企画を学会が後押し, 若手の会の国際企画に位置付ける。
- ・「若手の会強化 WG (仮称)」を組織して, 今後の企画運営の検討を行う。

3) 国際会議

- ・現在 JASIS で分析機器工業会が行っている国際会議をより充実させ, サポートするとともに, 分析化学会が主体となった

シンポジウムを JAIMA と共同企画する。特に中国, 韓国, 香港, 台湾, シンガポール, オーストラリアなどのアジア諸国を中心に, 国際的なアジア分析化学国際会議になるようなシンポジウムを作り上げる。

- ・Asiananalysis のほか, ICAS を発展させた「太平洋分析化学国際会議 (Pacific Analytical Chemistry Congress: PACC) (仮称)」を分析化学会が主体となって企画する。環太平洋国際会議 (Pacifichem, International Chemical Congress of Pacific Basin Societies) に参加する国の分析化学会あるいは分析部門を中心に参加を呼びかけて組織する。PACC の会期については, 日米電気化学会に併設する形とし, お互いの学会が融合したシンポジウムやミキサーも開催する。5 年ごとに行われている Pacifichem とのバッティングを避けるため, CPAC は, Pacifichem の間の年に開催することが望ましい (このようにすると, 約 2 年ごとにホノルルで分析化学関連の国際会議を開催できるようになり, 参加者の多い活発な国際研究発表の場となることを期待できる)。
- ・常置の「国際化推進委員会 (仮称)」を組織して, 今後の国際会議の企画と運営を行う。

4) 賞

- ・有功賞にほか, 企業会員, 維持会員および公設試に所属する会員を対象とした「優秀分析者表彰 (企業部門) および (公設試部門) (仮称)」, 「分析文化功労者表彰 (Analytical Sciences Heritage Award) (仮称)」を新設する。この賞は, 名誉会員の会で決定する。
- ・1 論文あるいは 1 特許であっても, 極めて優れた分析化学業績があった場合には, 毎年 1 件までの「20XX 年最優秀分析化学賞」を選定する。会員全員からの推薦を受け付けるものとし, 「年会活性化委員会 (仮称)」が選定し, 学会賞等委員会が決定する。
- ・賞の新設と規定については, 「賞新設 WG (仮称)」を設ける。既存の賞の選定法などの見直しも同時に行う。

5) 会員資格と会費

- ・学部生以下の若手 (高専, 高校生などを含む) については, 「準会員」として年会費を無料とする。
- ・学生会員については, 2 人以上の人数を設け, グループ単位の「学生グループ会員」と会費を設定する。学生の年会費はこれまで通りとするが, 毎年登録者名を変更できるものとする。
- ・永年会員と会費 (まとめ支払い) を検討する。
- ・公設試, 高専, 小中高などの教職員については, 年会費を半額に割り引く。高専, 小中高の教員の先生方 (特にスーパーサイエンスハイスクールなどの関係者) には, 連絡会などを組織していただき, ぶんせき誌などに「分析化学教育」および「分析化学実験」などの原稿を書いていただく。その際, オリジナルの内容がアル場合には, 「分析化学」に掲載するが, 3 年に一度くらいは特集号として, 初等・中等教育用の分析化学実験などを扱う。
- ・国外会員を新設し, 年会費は当面無料としてスタートし, 新しく作る英文会員誌「Analytical Chemistry Express (仮称)」を配布する。外国員向け英文 HP を新設し, それとリンクした相互情報発信 (facebook™ など) を準備する。
- ・特別会員の他に, 企業会員を設ける。企業会員では, 5 万円で (企業会員) 1 名までを登録でき, 毎年登録者名を変更できるものとする。なお, 企業会員では現状通り, 有功賞の推薦は維持会員でないといけないものとするが, 新設する「優秀分析者表彰 (企業部門) (仮称)」の推薦を 1 名まで受け付ける。

・会員増強キャンペーンとして、「新会員1年間会費無料キャンペーン」を実施し、新会員の当初1年間会費を無料とする。新会員が2年目になったときには、紹介者の会費を1年間2割引とする特典をつける。会員1名が新規会員1名(以上)を紹介するキャンペーンを積極的にPRして展開する。

6) 学会発行誌

・学会が国際化するためには、現在会員に配布されている「ぶんせき」誌のほかに、外国人向けに英文「ぶんせき」誌に相当するものを、「Analytical Chemistry Express 仮称」として配布する。まずは、現在配布しているメールマガジンの一部の英訳および Anal. Sci. の要旨などを中心に作成し、英文の広告も掲載する。当初は「国際化推進委員会(仮称)」が担当し、アジアおよび欧米各国の著名な研究者に配布する。必要によっては、「国際化推進委員会(仮称)」とぶんせき誌編集委員会が協力して、「Analytical Chemistry Express 編集委員会(仮称)」を新設する。事務局に、英文編集担当者を置く。

・すべての記事と論文を電子化して、eBook と同じように個別での編集や販売ができる体制を確立する(「学会電子化WG」が主体となって対応する)。

・JAIMA と共同して、英文の分析化学、機器分析の教科書および入門講座、DVDなどを企画、出版する。当初は、「国際化推進委員会(仮称)」が担当し、必要によっては、「分析教育WG(仮称)」を新設して対応にあたる。

7) その他(本部および事務局など)

・事務局の刷新→「事務局発展化WG」が対応中。IT業務(独立したサーバーが管理できる、HPの書き換えが自由に行える人材)、国際化業務(英語が自由に書け、国際会議をホストとして開ける事務力があり、英文会員誌を編集できるネイティブレベルの人材)、本部・支部会計管理業務ができる人材(会計士レベルの人材)が、今後必要。

・事務の電子化→「学会電子化WG」が対応。出版物・学会発表・講演会・講習会・会員管理の電子化など。

・学会ホームページの刷新→「HP刷新・活用WG」が対応。ホームページの活用、会員相互の情報交換、本部・支部・外部機関の情報整理、寄付受付、Web広告、JAIMAなどとのネットワーク化、英文HP作成などの刷新と充実。

・標準試料・分析事業所認定事業の安定運営スキームの検討→「標準試料・認定事業発展化WG(仮称)」が対応。事務体制のあり方と安定運営スキームの作成にあたる。

・会長の直属のワーキンググループあるいは企画運営委員会の中

に、「財務戦略WG」を発足させ、財務の向上および健全化と体制の強化を図る。

・寄付金および大型目的指定寄付金に対する常時受付と、教育および人材育成(中学生・高校生向けの分析実験講習や化学クラブ研究発表会などの支援)についての寄付を受け付ける規定および体制(ホームページを含む)を作る。

・理事会および委員会に出席できる大学以外の(企業会員や公設試など)を増やし、大学以外の視点を強化する。この際、JAIMAからの理事またはオブザーバー参加を検討する。

・各支部に「支部活性化および財務戦略WG」を作って、支部ごとの活性化を図る。支部長は理事を兼任し(任期2年)、本部・支部との連携を強化する。

上記活性化策実行のため、必要となる委員会およびワーキンググループ

新設する委員会およびワーキンググループ(WG)常置委員会

・「年会活性化委員会(仮称)」2013年5月発足(予定)

・「国際化推進委員会(仮称)」2013年5月発足(予定)

臨時ワーキンググループ(WG)

・「事務局発展化WG」2012年5月発足

・「学会電子化WG」2012年12月発足(予定)

・「HP刷新・活用WG」2013年5月までに発足(予定)

・「標準試料・認定事業発展化WG(仮称)」2013年5月発足(予定)

・「若手の会強化WG(仮称)」2013年5月発足(予定)

・「分析化学会女性研究者・会員ネットワーク新設WG(仮称)」2013年5月発足(予定)

・「賞新設WG(仮称)」2013年5月発足(予定)

・「財務戦略WG」2013年5月発足(予定)

なお、上記委員会とWGの発足にあたっては、既存委員会を再編し、上記学会活性化案が確実に実行できる体制を2013年2月の理事会に提案し、2013年度から新会長のもとで実行に移す。2013、2014年度は、委員会やWGの増加で支出が一時的に増えると考えられるが、赤字であっても実行し、2015年度からは定常的に活発な学会運営ができるように努める。

以上

日本分析化学会「学会活性化戦略委員会」委員(敬称略)

◎委員長、○副委員長

喜多村 昇(北大) 西沢精一(東北大) 平野愛弓(東北大) 遠田浩司(富山大) 角田欣一(群大)
 上原伸夫(宇都宮大) 前田瑞夫(理研) 千葉光一(産総研) 田尾博明(産総研) 丹羽 修(産総研)
 宮原裕二(医科歯科大) 内山一美(首都大) 沼子千弥(千葉大) 岡田哲男(東工大) 小澤岳昌(東大)
 浦野泰照(東大) 北森武彦(東大) 火原彰秀(東大生研) ○金澤秀子(慶大) ◎鈴木孝治(慶大)
 保倉明子(電機大) 馬場嘉信(名大) 湯地昭夫(名工大) 大塚浩二(京大) 加納健司(京大)
 吉田裕美(京都芸繊大) ○尾崎幸洋(関西学院大) 塚原 聡(阪大) 久本秀明(阪府大)
 金田 隆(岡山大) 今坂藤太郎(九大) 片山佳樹(九大) ○紀本岳志(紀本電子) 鈴木康志(島津製作所)
 高坂正博(島津製作所) 杉沢寿志(日本電子) 長谷川勝二(日本分光) 内田 稔(日立ハイテクノロジーズ)
 長谷部 潔(アジレントテクノロジー) 敷野 修(パーキンエルマー・ジャパン) 中田文弥(東ソー)
 黒田育磨(ジーエルサイエンス) 本田俊哉(日立製作所)